

人生経験を活かした「新しいキャリアへの挑戦」現場から

■この春「65期生」を送り出した職業能力開発センターとは

1988（昭和63）年の開設以来、65期1300名以上のミドルシニア人材をホテル・レストラン業界に送り出してきたのが、東京都立中央・城北職業能力開発センター（以下、同科）である。指導員の速水栄子さんは「真摯に学ぶ姿には指導する側も圧倒され刺激を受けています。シルバード代には人生経験や安定感が備わっているのに、同科の卒業生を雇用するホテルなどからは、リピート採用が切れ目なく舞い込んできます。卒業生も自然と、後輩のためにも頑張ろう」という意識が働くようです」と話してくれました。

■ホテルの歴史から実技演習までを受講して

そのカリキュラムは、1日90分授業4コマを半年間、合計800時限に及ぶ授業の中で、実技試験・筆記試験も多く、相当



春田久美子さん



河野賢哉さん

ハードなプログラムとなっているようです。65期生の一人である春田久美子さんはその内容を「駅舎から始まるホテルの歴史から、安全衛生法規、フロント実務、フルコースディナーの給仕や英会話に至るまで、必要な知識は全て学びます。しかもそれぞれの学びに奥行きがあり、毎日が楽しくて仕方ありません」とまばゆい笑顔で語ってくれました。

■人から直接感謝される仕事で念願成就

同じくクラスメートの河野賢哉さんは、長年大手銀行のシステム開発業務を担い、50歳代半ばで、同科の門をくぐってきたITの専門家です。同科への入学の動機を河野さんは「30年以上システムと向きあってきましたが、人から直接感謝される仕事に就きたいという思いが込みあげてきました。銀行で習得したはずの、尊敬語や謙譲語も、実はあやふやで、言葉遣いから学び直しています。接客もマニュアルの

側でなく、おもてなし精神で機転を利かせ、感謝されることも実習で味わっています」と充実の表情で語ってくれました。

■先生への感謝の念は、年齢にかかわらず

指導員の速水さんは、そんな訓練生の所作を見ながら、「講師陣もシニアだからとの手加減は一切しません。訓練生も、卒業・就職してはじめて、同科での厳しい訓練の有難みを感じているようです。卒業生の同窓会では、厳しかった先生方への感謝の言葉がいつまでも飛び交っています」と凛とした表情で続けてくれました。愛情溢れる同科の学びの現場は、「人は何歳からでも成長し、社会に貢献できる」とことを見事に証明していました。次号では、同科の修了生の活躍ぶりを紹介させていただきます。

池口武志（いけぐち・たけし）

一般社団法人定年後研究所長
1963年生まれ。1986年日本生命保険相互会社入社。現在、株式会社星和ビジネスリンク取締役常務執行役員、キャリアコンサルタント（国家資格）としても活動中。著書として『定年NEXT』『人生の頂点は定年後』がある。

一般社団法人定年後研究所

人生100年時代の中で、中高年社員のセカンドキャリアの充実に向けた調査活動を展開中。定年前後からの自走人生にチャレンジする会社員と、それをサポートする企業を応援。当記事へのご意見ご感想を、ポータルサイト <https://www.teinengo-lab.or.jp>「お問合せ」にお寄せください。

当ページのバックナンバーは、上記サイトをご覧ください。